

□ 一の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

住空間をきれいにするには、できるだけ空間から物をなくすことが肝要ではないだろうか。ものを所有することが豊かであると、僕らはいつの間にか考えるようになった。

高度成長の頃の三種の神器は、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、その次は、自動車とルームクーラーとカラーテレビ。戦後の飢餓状態を経た日本人は、いつしか、ものを率先して所有することで、豊かさや充足感を噛み締めるようになっていたのかもしれない。しかし、考えてみると、快適さとは、溢れかえるほどのものに囲まれていることではない。むしろ、ものを最小限に始末した方が快適なのである。何もないという簡潔さこそ、高い精神性や豊かなイメージーションを育む（a）オンシヨウであると、日本人はその歴史を通して、達観したはずである。

慈照寺の同仁齋にしても、桂の離宮にしても、空っぽだから清々しいのであって、ごちゃごちゃと雑貨やら用度品やらで溢れているとしたなら、目も当てられない。洗練を経た居住空間は、簡素にしつらえられ、実際にこの空間に居る時も、ものを少なくすっきりと用いていたはずである。用のないものは、どんなに立派でも蔵や納戸に収納し、実際に使う時だけ取り出してくる。それが、日本的な暮らしの作法であつたはずだ。

しかしながら、今の日本の人々の住宅は、仮に天井をはがして俯瞰するならば、どこの世帯もおおむね夥しいもので溢れかえっているのではないかと想像される。率先して所有へと突き進んだ結果である。（1）かつて腹べこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケツトを持つていないと不安なのである。しかし冷静に判断するなら、両方の手に何も持つていない方が、生きていく上では便利である。両手が自由なら、それを振って挨拶もできるし、時には花を活けることもできよう。両の手がビスケツトでいつも（b）塞がれていては、そういうわけにもいかない。

ピーター・メンツェルという写真家の作品に『地球家族』と題された写真集がある。これは多様な文化圏の家族を撮影したものだ。それぞれの家族は、全ての家財道具を家の前に持ち出して並べ、家を背景にして写真に収まっている。どのくらいの国や文化、家族の写真が収められていたかは正確に記憶していないけれども、鮮明に覚えているのは、日本人の家財道具が、群を抜いて多かったことである。日本人は、いったいいつの間にこんなにたくさんの道具に囲まれて暮らしはじめたかと、啞然とした気持ちでそれを眺めた。無駄と言いつけることはできないまでも、なくてもよいものたちを、よくぞここまで細かく取り揃えたのだとあきれる。別の言い方をすれば、ものの生産と消費の不毛な結末を静かに指摘しているようなその写真は、僕らがどこかで道を間違えてしまったことを暗示しているようであつた。

ものにはそのひとつひとつに生産の過程があり、マーケティングのプロセスがある。石油や鉄鉱石のような資源の採掘に始まる遠大なものづくりの端緒に（c）遡って、ものは計画され、修正され、実施されて世にかたちをなしてくる。さらに広告やプロモーションが流通の後押しを受けて、それらは人々の暮らしのそれぞれの場所にたどり着く。そこにどれほどのエネルギーが消費されることだろう。その大半が、なくてもいいような、雑駁とした物品であるとしたらどうだろうか。資源も、創造も、輸送も、電波も、チラシも、コマーシャルも、それらの大半が、暮らしに濁りを与えるだけの結果しかもたらしていないとするならば、これほど虚しいことはない。

僕らはいつしか、もので溢れる日本というものを、度を越えて許容してしまったかもしれない。世界第二位であつたGDPを、目に見えない誇りとして頭の中に装着してしまった結果か、あるいは、戦後の物資の乏しい時代に経験したものへの渴望がどこかで幸福を測る感覚の目盛りを狂わせてしまったのかもしれない。秋葉原にしてもブランドショップにしても、過剰なる製品供給の情景は、ものへの切実な渴望をひとたび経験した目で見るとすれば、確かに頼もしい勢いに見えるだろう。だから、いつの間にか日本人はものを過剰に買い込み、その異常なる量に鈍感になってしまった。

しかし、そろそろ僕らはものを捨ててはいけない。捨てることのみを「もつたいない」と考えてはいけない。捨てられるものの風情に感情移入して「もつたいない」と感じる心持ちにはもちろん共感できる。しかし膨大な無駄を排出した結果の、（2）廃棄の局面でのみ機能させるのだとしたら、その「もつたいない」はやや鈍感に過ぎるかもしれない。廃棄する時では遅いのだ。もしそういう心情を働かせるなら、まずは何かを大量に生産する時に感じた方がいいし、さもないければそれを購入する時に考えた方がいい。もつたいないのは、捨てることではなく、（3）廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。

だから大量生産という状況についてももう少し批評的になった方がいい。無闇に生産量を誇ってはいけないのだ。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴイスティックな成長意欲だけではない。（4）所有の果てを想像できない消費者のイメージネーションの脆弱さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。さして必要でもないものを溜め込むことは決して快適ではないし心地よくもない。

良質な旅館に泊まると、感受性の感覚が数ランク上がったように感じる。それは空間への気配りが行き届いているために安心して身も心も解放できるからである。しつらいや調度の基本はものを少なく配することである。何もない簡素な空間にあってこそ、畳の目の織りなす面の美しさに目が向き、壁の漆喰の風情にそえられる。床に活けられた花や花器に目が向き、料理が盛りつけられた器の美しさを堪能できる。そして庭に満ちている自然に素直に意識が開いていくのである。ホテルにしても同様。簡潔に極まった環境であるからこそ一枚のタオルの素材に気を通わせることができ、バスローブの柔らかさを楽しむ肌の繊細さが呼び起こされてくるのである。

（中略）

白木のカウンターに敷かれた一枚の白い紙や、漆の盆の上にことりと置かれた青磁の小鉢、塗り碗の蓋を開けた瞬間に香りたつ出し汁のにおいに、ああこの国に生まれてよかったと思う利那がある。そんな高踏な緊張など日々の暮らしに持ち込みたくはないと言われるかもしれない。緊張ではなくゆるみや開放感こそ、心地よさに繋がるのだという考え方も当然あるだろう。家は休息の場でもあるのだ。しかし、だらしなさへの無制限の許容がリラクゼーションにつながるという考えは、ある種の（d）ダラクをはらんではいいまいか。ものを用いる時に、そこに潜在する美を発揮させられる空間や背景がわずかにあるだけで、暮らしの喜びは必ず生まれてくる。そこに人は充足を実感してきたはずである。

伝統的な工芸品を活性化するために、様々な試みが講じられている。たとえば、現在の生活様式にあったデザインの導入であるとか、新しい用い方の提案とかである。自分もそんな活動に加わったこともある。そういう時に痛切に思うのは、漆器にしても陶磁器にしても、問題の本質はいかに魅力的なものを生み出すかではなく、それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるかである。漆器が売れないのは漆器の人氣が失われたためではない。今日でも素晴らしい漆器を見れば人々は感動する。しかし、それを味わい楽しむ暮らしの（5）余白がどんどんと失われているのである。

伝統工芸品に限らず、現代のプロダクツも同様である。豪華さや所有の多寡ではなく、利用の深度が大事なのだ。よりよく使い込む場所がないと、ものは（e）成就しないし、ものに託された暮らしの豊かさも成就しない。だから僕たちは今、未来に向けて住まいのかたちを変えていかななくてはならない。育つものはかたちを変える。「家」も同様である。

ものを捨てるのはその一歩である。「A」をより前向きに発展させる意味で「捨てる」のである。どうでもいい家財道具を世界一たくさん所有している国の人から脱皮して、簡潔さを背景にものの素敵さを日常空間の中で開花させることのできる繊細なBをたずさえた国の人に立ち返らなくてはいけない。

持つよりもなくすこと。そこに住まいのかたちを作り直していくヒントがある。何もないテーブルの上に箸置きを配する。そこに箸がぴしりと決まったら、暮らしはすでに豊かなのである。

（原研哉『日本のデザイン』岩波新書）

注 「慈照寺の同仁斎」・・・銀閣寺にある書斎

「桂の離宮」・・・京都にある有名な日本庭園

「青磁」・・・透明感のある青緑色の磁器

問一 傍線部（a）（e）のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

（a）オンシヨウ （b）塞がれ （c）遡って （d）ダラク （e）成就

問二 傍線部（1）「かつて腹へこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケットを持っていないと不安なのである」とありますが、誰のどのような状態を例えたのですか。簡潔に答えなさい。

問三 傍線部(2) 「廃棄の局面でのみ機能させる」について、「もったいない」をどう考えることかを簡潔に答えなさい。

問四 傍線部(3) 「廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されること」とはどういうことを表していますか。そのことを端的に示す言葉を文中より五字以内で抜き出さない。

問五 傍線部(4) 「所有」について、次の(一)・(二)の各問いに答えなさい。

(一) 「所有」の本来の目的は何だと筆者は述べていますか。文中より十五字以内で抜き出さない。

(二) また、今の日本人の「所有」のあり方を表した表現を、文中より二十字以内で抜き出さない。

問六 傍線部(5) 「余白」とはどういうものですか。その内容を示す表現を、文中より二十字以上二十五字以内で抜き出さない。

問七

A	・	B
---	---	---

 に当てはまる言葉を文中より抜き出さない。なお、Aについては傍線部(3)より前の文章から六字の言葉を、Bについては傍線部(3)以降の文章から三字の言葉をそれぞれ抜き出さない。

問八 筆者の趣旨と一致するものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、家は休息の場であり、不要なものは捨て、ゆるみや開放感があることで心地よさに繋がる。

イ、伝統工芸品の活性化には、まずいかに魅力的な素晴らしい漆器を作るかが重要となる。

ウ、企業が消費者の購買欲を高めるための策略を図ることにより、なくてもよいものを生み出した。

エ、ものを所有することが豊かなのではなく、ものをなくすことでわたしたちの生活は豊かになる。

オ、戦後の物資の乏しい時代を経験している日本人が、物を消費することで豊かさを求めることはやむを得ない。

二

 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

書籍編集者として三十二年間勤めた出版社を定年退職した日、私は自分が手がけた本のタイトルと著者名を書き出してみた。ああ、我ながらよくやったものだ、と自己満足に(a)浸りたかった訳ではない。ほんの出来心から、会社の茶封筒(中には年金や健康保険にまつわるややこしい書類、退職者で作る親睦グループ『空耳会』への入会案内書などが入っていた)を裏返し、遠い記憶を思い出すままに走り書きしていっただけのことである。しかしもちろん、無事会社を勤め上げた日の夜、一人書斎の机に座り、本棚からはみ出した本の山々に囲まれ、多少A的な気分(b)陥っていたのは否定できない。

実際作業をはじめてみれば、意外にもすると一冊一冊がよみがえってきて、自分でも驚くほどだった。多少あいまいなところも、手帳を開けばすぐさま明らかになった。不思議なことに、ちよつとした誤解から二度と会えない関係になったり、行方不明で連絡が取れなくなったり、もう随分前に死んでしまった作家や詩人たちの方が、より生々しく思い出された。彼らと交わした言葉、仕草、酒の飲み方、電話の声、ガラに書き込まれた赤い文字。そういうさまざまなものたちと共に、彼らの本の姿が、判型から帯の文句、花布の色まで、茶封筒に映し出された。

私は、名物、花形、敏腕、などの形容とは無関係の編集者だった。ベストセラー作家を数多く抱え、若き天才を華々しくデビューさせるようなタイプとは程遠かった。地道さと粘り強さだけが取り柄で、他には何も誇れる点などなかった。

私が担当した書き手たちの多くはベストセラーとは無縁だったが、皆、高い志を持っていた。しかもその志の高さが世間ではなかなか(c)ムクわれず、立ち往生したり、やけを起こしかけたり、沈黙の沼に沈んだりしていた。そんな彼らの傍らにあり、「大丈夫です。あなたが向かおうとしている場所は正しいのです。何の心配もいりません。もしあなたが途中であきらめたら、あなたが書くこうとしているそれは、永遠に置き去りにされたままなんですよ」と、(1)声にならない声で耳打ちするのが私の役目だった。

編集者の中には道を先回りし、自らがBとなって作家が行くべき方向を照らす人もいる。互いの手首を紐で結び合った、盲人ラ

ンナーと伴走者のような関係を築く人もいる。それに比べれば私の果した役目は、ずっと（d）ヒカえめなものだったと言わざるを得ない。私が最も恐れたのは、書き手たちの邪魔になることだった。それは時に、本の表紙に誤植を出す失敗よりも重大な恐れであった。

「邪魔者になるな。」この一行を私は、編集者人生を貫く警句とした。尊敬し惚れ抜いた作家であればあるほど、無闇に近づきすぎないよう細心の注意を払い、彼らの視界の最も目立たない片隅に居場所を定めた。ただしその一隅は秘密の通路で鼓膜とつながっていないければならなかった。役目の大半は耳打ちであつたからだ。地下からくみ上げられた一滴の水が維管束を伝って雌しべへと養分を運ぶような、ささやきが書き手へと伝わる通路、それを探り当てることが最も大事な務めだった。その通路さえ確保しておけば、書き手たちは「C」の言葉を、編集者からの声ではなく、自分の心の中から響いてきたもののように聞き取り、一行めを書き付けるためにペンを握ることができるのだった。

リストはすぐさま百冊を超え、茶封筒の裏一面では足りない気配になってきた。部屋を取り囲む本たちはいつそう静けさを増し、カーテンを引き忘れた窓の向こうは闇に満たされていた。机の上は手帳からこぼれ落ちた名刺や、意味不明のメモ用紙や、色見本帳のチップなどが散らばっていた。

書き手たちと会って別れる際、タクシーであろうとエレベーターホールであろうと駅のホームであろうと、私は彼らの後ろ姿が完全に見えなくなるまで見送った。社会人のマナーとしてというより、（2）そうしないではいられない自らの欲求に従った結果、という方が正しかった。ほんのわずか力を入れればたちまち折れてしまうほどのペン一本を頼りに生きている彼らは、一本のペンと同じくらい弱く、その弱さは後ろ姿にのみ表れ出た。大御所も新人も関係なかった。

降り出した雨に肩を濡らしながら、あるいは夜明け前の薄ぼんやりした明かりの下で疲れきった体を持て余しながら、彼らの後ろ姿を眺めるのが私は好きだった。そこに浮かぶ深い弱さを感じ取り、掌にすくい上げ、じっと見つめることは、一冊の尊い本を読むのと同じだった。

私は見送っていたのではなく、祈っていたのだらうと思う。（3）おぶったものの重みに押し潰され^{つぶ}、ばったり両膝をついた拍子に、握ったペンを手放してしまわないよう願っていたのだ。

ただ、正直に言えば、祈るよりは悪態をつきたくするような人柄の書き手も、いるにはいた。こんなにも素晴らしい小説を生み出せる人がなぜ、と打ちのめされる思いを抱いたことは、一度や二度ではなかった。しかし編集者にとって（4）書き手の人柄は守備範囲外の問題だ。少なくとも自分はその方針を通した。どんな悪人であろうと、その手が書き上げた一冊が（e）シジョウの喜びをもたらすのであれば、私は彼の本を無条件で愛することができた。彼の背中に向かい、祈りを捧げることができた。

いつしかリストは茶封筒を埋め尽くしていた。タイトル、著者名、タイトル、著者名、タイトル、著者名の連なりは、他人からすれば単なる記号に過ぎないだろうが、私にとっては多くの書き手たちから贈られた一続きの（5）抒情詩だった。

最後の一冊までたどり着くと、もう一度読み返して漏れがないかチェックし、誤字脱字を直し、全体を眺めてちよつとしたアクセントを加えるつもりで、タイトルの前に全部小さな黒丸を打っていた。そしてすべての作業を終えたあと、そこだけ残してあつた先頭、生まれて初めて自分が作った本という名称を与えられるたった一つの空欄に、そつと一行記入した。

・『物理の館物語』（作者名 不明）

（小川洋子『物理の館物語』新潮社）

注 「花布」・・・製本で中身の背の上下両端に貼り付ける布

問一 傍線部（a）（e）のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

（a）浸り （b）陥って （c）ムクわれ （d）ヒカえめ （e）シジョウ

問二 Aに入る適語を次より選び、記号で答えなさい。

ア、直観 イ、感傷 ウ、能動 エ、情緒 オ、自虐

問三 B には「行くべき方向を照らす」ものを表す名詞が入ります。当てはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

問四 C に当てはまる五字以内の表現を、文中より抜き出しなさい。

問五 傍線部（1） 「声にならない声で耳打ちする」とありますが、それを心がけていた理由を簡潔に答えなさい。

問六 傍線部（2） 「そうしないではいられない自らの欲求」とはどういう気持ちからうまれたものですか。簡潔に説明しなさい。

問七 傍線部（3） 「おぶったものの重み」とはどういうものですか。簡潔に説明しなさい。

問八 傍線部（4） 「書き手の人柄は守備範囲外の問題」とはどういう意味ですか。解答欄に従って簡潔に答えなさい。

問九 傍線部（5） 「抒情詩」について、タイトル、著者名の連なりが「記号」でなく「抒情詩」であるとはどういうことですか。簡潔に説明しなさい。